

自然誌 だより

Natural history

秋

三重自然誌の会情報誌 106 号

2015年 12月

アライグマ、三重県で拡大中

アライグマの原産地はカナダ南部からパナマで、日本へはペットとして過去に輸入され、逃亡や放たれた個体が各地で野生化しています(阿部ら2005；日本の哺乳類改訂版)。私の住む松阪市の広報まつさか(2015年10月号)にも「アライグマを見かけたら連絡ください!」との記事があり、市内での目撃情報も増えているそうです。本種は雑食性であるため、農作物への被害も心配されますので、市では「松阪市アライグマ防除実施計画」を2014年に策定しています。また、ブラックバスなどと同じように外来生物法による「特定外来生物」指定(2005年)されていますので、輸入、販売、飼育や野外へ放すことは禁止されています。



A



B



C



D



E

写真1 A；多気町産剥製，B；御浜町（中井節二・撮影），C；スイカの食害，熊野市（西村浩志・撮影），D；桑名市多度町（水谷憲二・撮影），E；紀北町（吉澤映之・撮影）。詳細は本文参照。

このように基本的に駆除対象で、保護の対象となっていないためか捕獲や目撃情報が公表されることは少なく、三重県内に広く生息していると思われるにもかかわらず三重県農業研究所の資料によると県内各地で被害がみられる (<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/marc/jyugai/higaitizu4.htm>. 2015年12月8日閲覧) 記録は皆無の状況です。そこで、これまでに得ているアライグマ情報を整理して記録しておきたいと思います。

① 1993年4月3日，多気町前村井戸谷（3次メッシュコード5136-5452）

国道42号線を車で走行中，井戸谷バス停付近の路肩で死亡していました。発見時には、「珍しいくらい大きなタヌキ」と思い，標本にするため紀伊長島の東剥製に持ち込み，そこでアライグマと教えてもらいました(写真1 A)。この情報が，県内におけるアライグマの初記録と思われますが，同じ年に五桂池ふるさと村に「花と動物のふれあい広場」，通称・五桂動物園が開園し，本種も飼育されていました。井戸谷と五桂は2.5kmほどしか離れていませんので，動物園からの逃亡を疑い電話で問い合わせましたが，「逃げていない」との返答でした。

② 2008年1月11日，御浜町志原（5036-6014）

中井節二さんが県道141号（オレンジロード）で死体を確認され，その写真を本会HPに掲載しました(写真1 B)。また，三重県紀州地域農業改良普及センターの確認ではトウモロコシやスイカ等への被害も発生しているそうです（鈴木賢，私信）(写真1 C)。

③ 2010年1月24日，桑名市多度町猪飼（5236-5540）

水谷憲二さん宅の車庫にアライグマ1個体が入り込んだのを水谷さんが撮影され，その写真の提供を受けました（写真1 D）。その後は出没していないとのこと。

④ 2010年9月18日18時50分，紀北町海山区船津

吉澤映之さんがツキノワグマ観察のために設置した自動撮影カメラに写りました (<http://calmbear.main.jp/calmbears/araiguma.html>. 2015年12月8日閲覧；写真1 E)。人家や農耕地周辺だけでなく，紀伊山中への侵入を示す貴重な記録です。



写真2 足跡，松阪市

⑤ 2015年6月22日，松阪市藤之木町（5136-6369）

自宅近くの山ぎわの田んぼのなかで本種の足跡を確認しました(写真2)。昨年も同じ場所で本種の足跡をみていますので，継続的に生息しているようです。

⑥ 2015年11月7日，津市半田青谷（5236-0430）

石橋正人さん宅のベランダに吊した干し柿が食べられ，残された足跡の写真を送ってもらったところ，本種と判明しました(写真3)。干した渋柿に飛びついて採ったものの，少しだけかじってはき出していたそうです。懲りたのか，その後は来ていないそうです。



写真3 足跡，津市（石橋正人・撮影）

外来種アライグマは，1970年代に放映されたテレビアニメ「あらいぐまラスカル」人気で，当時は年間1500頭が輸入されていたそうです(揚妻-柳原2004；哺乳類科学44(2))。

当然のことながら成長するにつれ人の手に負えなくなりますので，個人ではもてあましてしまい，多くは野外に放され，定着して有害駆除の対象になっていると思われます。「可愛い顔には気をつけよ」という教訓にすべき事例でしょう。情報・写真を提供していただいた皆さんに感謝いたします。

(清水善吉：松阪市日丘町 1386-17)

アカエリヒレアシシギの採餌

今 堀 聖 史

アカエリヒレアシシギは馴染みのない名の鳥ですが、きれいな姿で忙しげに餌を捕るようすは見飽きることはありません(写真1)。春と秋に外洋を大群が通過していくのが船上から観察され、明石海峡では1万羽の大群になることもあると図鑑に記されています。しかし、私たちが通常観察できるのは渡りの季節に外洋がしけて鳥の群が内陸に避難してきたときに限られます。4～5月の北上する季節はそうした気象条件になることは稀で、内陸で観察する機会はほとんどありません。一方、8～9月の南下する時期に台風がくると、暴風を避けて内陸に避難してくることがあります。海岸に近い湿地や池、休耕田などで餌を捕っていますが、場所は不定で滞在日数は長くて2～3日です。台風が通過した後に海岸周辺をまめに巡回して出会いを期待するしかありません。

今年は台風18号が9月8日から9日にかけて伊勢湾を通過、9日午前10時ころ知多半島に上陸するまで数日間強風が吹き荒れ、ときおり豪雨も降る気象条件でした。10日に雲出川河口で鳥を見ていた時、明和町にアカエリヒレアシシギの大群が来ているという連絡をもらって駆けつけました。200羽ほどの群が海岸から500～600mの刈田に飛来、青々と茂る二番穂にいる虫を捕っ



写真1 松阪市高須金剛川横の池。円を描いて泳いで水面に渦を作りプランクトンを捕る(2008.8.26)



写真2 明和町被川近くの刈田(2015.9.10)

ていました(写真2)。撮影した画像を拡大してみるとツマグロオオヨコバイで、嘴で器用につまみ飲み込んでいました。二番穂にはこの虫が大発生していたようです。また、刈った後の稲株や藁くずから小さな褐色のものをつまみ食べていましたが何かは判りませんでした。ヨコバイのような小さな虫で腹を満たすには数多く摂取しなければなりませんが、忙しく動き回るエネルギーに見合うのだろうかと思いました。一昨年、津市木造町に避難してきた20羽ほどのアカエリヒレアシシギは、休耕田の背丈の低い草から小さなものを捕って食べていました。海洋プランクトンの方が栄養価は高いと思われますが、1～2日の非常食なのかもしれません。

アカエリヒレアシシギの渡りは、日本で稲が栽培される以前から続いているでしょうし、台風からの避難も毎年のように繰り返されてきたに違いありません。海岸湿地があり、稲作が農業の中心だった時代はアカエリヒレアシシギの避難場所がどこにでもあったと推定できます。しかし、この数十年を考えると、稲作の方法や時期が変わり、海岸湿地もなくなり、この鳥の避難場所は確実に減少しています。アカエリヒレアシシギに出会うことは今後ますます難しくなりそうです。

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

外来種アマゾントチカガミが伊勢市に出現

中 優

福島県にお住まいの方とのフサタヌキモに関する情報交換の中で、神宮の外宮の勾玉池にも生育していた記録があるとのことで、その確認に外宮へ出かけた際に外周の水路でアマゾントチカガミを確認したので報告する。なお、本来の目的であるフサタヌキモについては、勾玉池の周回歩道が工事の関係で通行できなかったため調べていない。

トチカガミ科に属するアマゾントチカガミ (*Limnobium laevigatum*) は、角野 (2014; ネイチャーガイド日本の水草) によると、南米原産で「観葉植物として流通しているが各地で逸出が続出している」とのこと、今回の確認例はこの逸出のケースにあたるものと考えられる。

確認日は2015年9月10日で、場所は伊勢市岡本3丁目の外宮内からの谷水が流れ込む水路で (写真1)、水路への流入口付近の土砂が堆積している場所では抽水形、これに続く水深が深くなる場所では浮葉形と生育形を変えている (写2, 3)。ただ、今回はこの報告だけに留まらない。

このアマゾントチカガミの生育地からわずか300m北にある別水系の水路のおよそ150mにわたる区間で、アサザとトチカガミそれにマツモの生育を確認したのである (写真4~7)。アサザは三重県レッドデータブック2015 (三重県農林水産部みどり共生推進課2015) によると絶滅危惧ⅠA類に該当し、既知の生育地は四日市市と南伊勢町、トチカガミは絶滅危惧ⅠB類に該当し、既知の生育地は桑名市、伊賀市、紀北町で、現在も健在なのは桑名市だけとなっており、マツモも準絶滅危惧に該当している。この水路の山側は外宮であるが反対側は住宅地であり、こんな環境に絶滅危惧3種が生育しているのである。

片側が外宮であるので、これら3種が自然生育している可能性を否定することはできないが、人目に付きやすい場所にもかかわらずこの場所での生育の報告がないこと、在来と外来のトチカガミがわずか300mの距離をおいて出現していること、そして決定的であるのは、この水路と道路を挟んだお宅の方から「30年前からこの場所に住んでいるが住み始めた頃には白色 (トチカガミと思われるがオオ



写真1 アマゾントチカガミの生育場所



写真2 アマゾントチカガミ (抽水形)



写真3 アマゾントチカガミ (浮葉形)



写真4 アサザ



写真5 トチカガミ



写真6 マツモ



写真7 トチカガミ等の生育場所

カナダモかもしれない) や黄色 (アサザ) の花を付ける水草はなかった」のお話を聞いたことから、人為的に持ち込まれた (放流された) 可能性が高いものと判断している。ただ、マツモについては従来からこの場所に生育していた可能性もあり、他の2種についても隣接地が外宮であることから自然生育を完全に否定できるものではない。機会があれば、外宮内にある池の調査を行い、これらの水草が外宮に由来するものであるのかないのかを検証してみたいと考えている。

アマゾントチカガミが日本にも逸出・定着しているとの情報をいただいた山本和彦さんに感謝する。
(なか まさる：伊勢市小俣町1284)

三重県内のヒヨドリバナ類

市 川 正 人

ヒヨドリバナ類 (*Eupatorium* 属) は、渡りをする蝶として有名なアサギマダラが訪花する吸蜜植物であり、種類によって強弱はありますが、乾燥標本でもフジバカマで知られているようにクマリンの匂いがします。菰野町雲母峰山麓で20年前に採取のキクバヒヨドリ (別名：ニオイヒヨドリ) の標本は今でも良く匂っています。この仲間は、数種を除いて最近まで普通に見ることができましたが、他の植物と同様、シカによる食害で激減しています。

三重県内に生育するヒヨドリバナ類には、ヨツバヒヨドリ (A；ハコネヒヨドリを含む)、フジバカマ (B；三重県 RDB では絶滅危惧 I A 類にあげられており、県内では現在生育を確認できないが近隣の愛知県愛西市で2015年に生育を確認)、サケバヒヨドリ (C)、サワヒヨドリ (D；ミツバサワヒヨドリを含む)、オオヒヨドリバナ (E)、キクバヒヨドリ (F；広義のヒヨドリバナはオオヒヨドリバナとキクバヒヨドリを含む)、ミツバヒヨドリバナ (G；サワヒヨドリ×ヒヨドリバナとの見解もある)、ホシナシヒヨドリバナ (H) が生育しています。加えて、図鑑にはありませんがサワヒヨドリ×サケバヒヨドリの雑種も確認しています。これらの内、一般的にヒヨドリバナと呼ばれているものは形態的にオオヒヨドリバナとホシナシヒヨドリバナにあたるのではないかと思います。

これらは、花色は多少異なりますが、つくりはすべて類似しており、同定のポイントは葉の形態と葉裏腺点 (葉の裏にあるごく小さな分泌腺) の有無です (下表、A～Hは上記の種名に対応)。ただし、葉の長さに対する葉幅は種内変異が大きいので注意を要します。

	A	B	C	D	E	F	G	H
葉の形態	3・4枚 輪 生	対生・3裂 が 混 在	対生・羽状 に 分 裂	対生・3交脈的 (ミツバサワヒヨドリ は3深裂・3交脈的)	対 生	対生・羽状 に 分 裂	対生・3裂 が 混 在	対 生
腺点	有	無	無	有	有	有	有	無

サケバヒヨドリとキクバヒヨドリ、オオヒヨドリバナとホシナシヒヨドリバナ、ミツバヒヨドリバナとフジバカマなどは形態が類似していますが腺点の有無で容易に分類できます。

園芸品のフジバカマ (ニセフジバカマ) (村田源2008, 山梨植物研究21号) の葉はほとんどが3深裂し、照りがあって野生種とは異なること、オオヒヨドリバナやミツバヒヨドリバナがウイルス病 (モザイク病：葉がモザイク状に黄変) にかかりやすいことなどが知られています。



写真1 オオヒヨドリバナ, いなべ市藤原町



写真2 オオヒヨドリバナ (モザイク病), 津市産品



写真3 キクバヒヨドリ, 菰野町菰野



写真4 サケバヒヨドリ, 津市産品



写真5 ミツバヒヨドリバナ(モザイク病), 菰野町菰野



写真6 ヨツバヒヨドリとアサギマダラ, 菰野町 鎌ヶ岳



写真7 ホシナシヒヨドリバナ, 津市産品



写真9 ニセフジバカマ(栽培品), 鈴鹿市池田町



写真10 フジバカマ, 愛知県愛西市葛木町



写真8 サワヒヨドリ, いなべ市大安町

(いちかわ まさと：四日市市堀木1-4-5, 606)

鈴鹿青少年の森湿地植物保全活動のご案内

鈴鹿サーキットに隣接して鈴鹿青少年の森という都市公園が整備されており、その一角の湿地にはシラタマホシクサやサギソウなどの植物が生育しています。市街地のなかに残された貴重な湿地なのですが、周辺の環境変化もあってか放置すると遷移が進んでしまいます。そこで、年に一度、草刈りを行って湿地環境の維持を行っており、今年も下のよう to 実施しますのでご参加ください。

日時：1月20日(水) 午後1時半～(2時間程)

場所：鈴鹿青少年の森, 孔雀舎傍(道伯池南側)

内容：草刈りと運び出し(少し植物解説あり)

持ち物：軍手, 長靴を履いてきてください



昨年度の作業のようす

交尾でオスが見せたメスへの驚くべき動作の新発見ーモノサシトンボー

浅 名 正 昌

トンボの交尾動作は、メスが能動的に腹部の先端を持ち上げ、産卵管または産卵弁をオスの副性器と結合させて成立する。一方オスは、副性器にメスが産卵管または産卵弁を合わせやすいように、腹部を上げて調整するぐらいである。だが、2013年9月13日に三重県名張市赤目町の長屋池で撮影したモノサシトンボの交尾で、オスが交尾時にとった動作はまったく想像もしなかった驚くべきものだった。

それは、産卵を終えたモノサシトンボの連結個体が倒木の先端に止まり、再度交尾に向けてメスが産卵管をオスの副性器に結合させようと、何回も腹部の先端を持ち上げようとしていた。しかし、副性器までは届かず諦めて腹部を下げてしまった(写真1)。メスがよほど疲労しているのだなと思いながら、なおも見てみると、少し休息してから再び交尾に向けた動作をメスがとった。だが、結果は前と同じだった。この失敗の動作を大きく3度繰り返すのを見たとき、交尾態になる瞬間を撮影しようとカメラをセットして、4度目に成功した交接の一瞬を連写で撮影した。

帰宅後パソコンに向かい整理していて驚いたことは、今まで何度も目にしている交尾の瞬間では一度も目にすることのなかったオスの動作が写りこんでいたことだった。それは、

- ① オスが、交尾のために持ち上げてきたメスの腹部先端に左後肢を添え、メスの腹部が下がらないように支えていたこと(写真2-A)。
- ② 続いて右後肢もメスの腹部先端に添えて両後肢で挟み、腹部が下がらないように支えながら、産卵管を副性器へ誘導していたこと(写真2-B)。
- ③ メスの腹部先端を両後肢でしっかりと挟み、オスも腹部を少し下げて産卵管を副性器と結合させていたこと(写真2-C)。
- ④ 交尾が成功すると、メスの腹部先端から両後肢を離し、安定した最初のつかまり状態の姿勢に戻っていたことだった(写真2-D)。

なお、掲載写真No.2のA～D 4枚に見られるオスの連続動作は、1秒間に8枚の連写によってたまたま確認できたもので、人の眼ではまず気づけなかった一瞬の出来事だったと思う。

今後、他種においても疲労したメスとの交尾の際には、このモノサシトンボのオスが見せたメスをいたわる優しい動作が、他種のオスも同じように行っているのか、それとも、この個体だけの特異な動作だったのかを確かめることが課題となる。



写真1 交尾を試みるペア（下がメス）



写真2 A；左後肢を添える，B；右後肢も添える，C；両後肢で支え誘導，D；結合後は放す

(あさな まさよし：伊賀市緑ヶ丘 2424-11)

和歌山県東牟婁郡における蝶等の記録

長谷川 好昭・松岡 誠治

2015年10月31日から11月1日に和歌山県で行われた紀伊半島三
県フィールドワーク交流会④「北大和歌山研究林」およびその道
中も含め、和歌山県東牟婁郡内において採集および観察したチョ
ウ等の昆虫類を報告する。

採集、目撃記録は以下のとおりである。なお（ ）内には、食
草を示し、また筆者ら以外の採集資料についてはその氏名も記し
た。

2015年10月31日

串本町荒船海岸 サツマシジミ；15 頭採集、クロマダラソテツ
シジミ；1 頭（写真1）・9 蛹・1 幼虫採集（ソテツ）、アサギマ
ダラ；数頭マーキング。古座川町佐田今津橋 サツマシジミ；1
♂採集。古座川町真砂 アサギマダラ；1 頭マーキング。古座川
町平井北海道大学和歌山研究林 キリシマミドリシジミ；1 卵採
集（アカガシ）（写真2）、トビナナフシ；1 頭採集（写真3）、ク
ロスズメバチ；2 頭死骸採集。

2015年11月1日

古座川町平井北海道大学和歌山研究林本館 ウラギンシジミ；
1 死蛹採集（植栽フジ）、コムスジ；1 幼虫採集（植栽フジ）、コ
ミスジ；1 幼虫採集（植栽フジ・中優採集）。古座川町西川栃谷
アサギマダラ；1 ♂1 ♀採集、アサギマダラ；数頭マーキング。
古座川町西川まぼろしの滝 カギバイラガ；1 幼虫採集（イロハ
モミジ）、イシガケチョウ1 頭目撃。古座川町西川 サツマシジミ；
1 ♂採集、ヤマトシジミ；1 ♂採集。古座川町松根クエの滝 カ
ギバイラガ；2 幼虫採集（イロハモミジ）。太地町くじら浜公園
クロマダラソテツシジミ；2 卵採集（ソテツ）。

最後に、資料を提供していただいた中優氏、今回のホスト役で
ある和歌山県メンバーの皆さんや現地案内等大変お世話になった
北海道大学和歌山研究林の揚妻直樹氏およびスタッフに深謝する。

（はせがわ よしあき：鳥羽市鳥羽1丁目23-4・まつおか せいじ：四日市市泊村813-8）



写真1 羽化直後のクロマダラソテツシジミ（ホストはソテツ）



写真2 キリシマミドリシジミの卵（ホストはアカガシ）



写真3 トビナナフシの標本

編集後記

庭にハマボウの木が1本植わっています。20年程前に刀根政郎さんに苗木をいただいたもので、夏の花や秋の黄葉を毎年楽しんでいます。今年は実生苗がたくさん育ちました。これまでも1～2本はたまにありましたが、百本近くの生育は初めてです。狭い庭ですので抜いてしまわなければならないので、どなたかもらってもらえると嬉しいです。次号は3月上旬発行を予定しています(善)。

自然誌だより106号

発行日 2015年12月21日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp